

火山泥流・土石流

十勝岳



噴火の概要

発生日時 1926年5月24日

噴火位置 山頂中央火口丘

被害状況 2月中旬頃から大噴火口から礫放出。5月24日12時11分頃噴火、小規模な泥流発生。16時18分頃噴火、中央火口丘の北西部が破壊され、熱い岩屑なだれが積雪を溶かして大規模な泥流発生。死者・行方不明144名、負傷者約200名。建物372棟、家畜68頭、山林耕地被害。

被害状況は気象庁ホームページによる

まだ残雪が残る5月の十勝岳での噴火で、火口周辺で岩屑なだれが発生し、それに伴って雪が溶かされて泥流が発生したんだ。

泥流はわずか25分あまりで20km前後離れた上富良野町や美瑛町に流れ下って大きな被害が生じた。

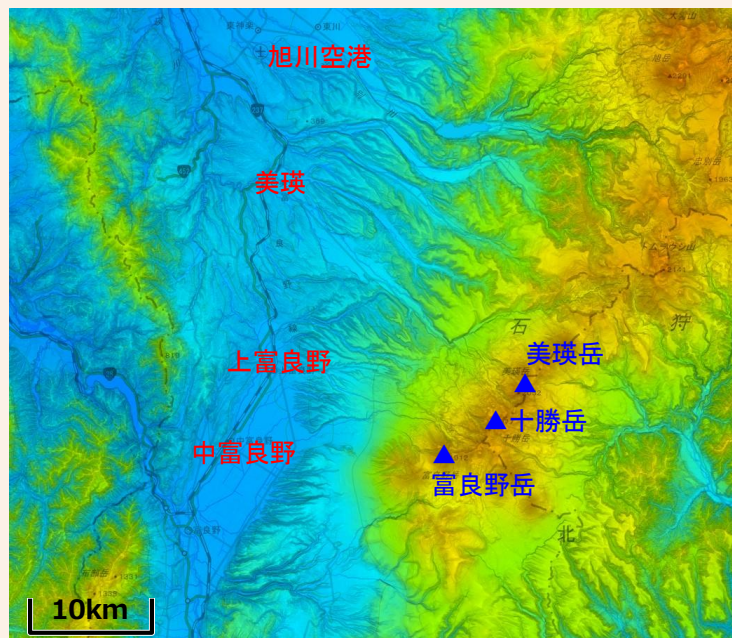
火口から遠く離れていても、泥流などが発生すると影響が及ぶ恐れがあるよ。



十勝岳位置

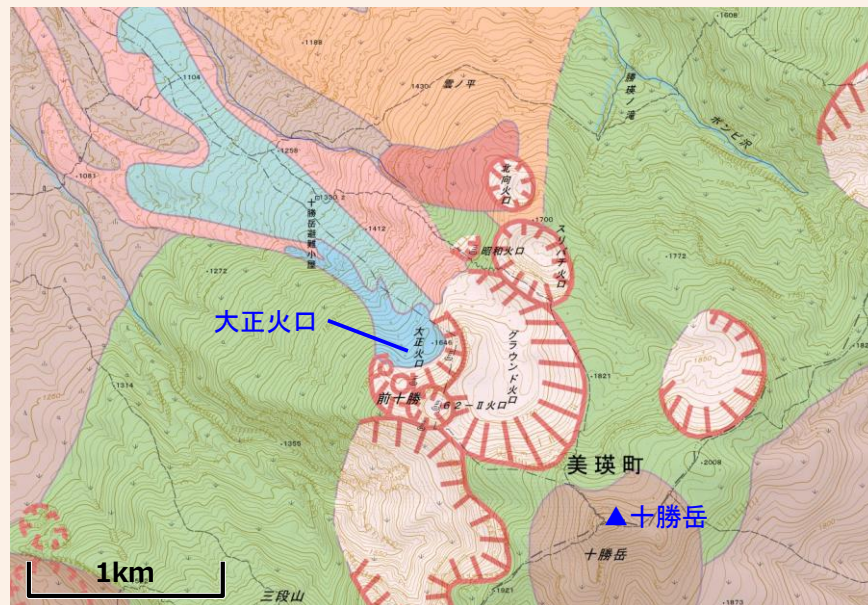
地理院地図

(自分で作る色別標高図と傾斜量図)



火口位置

火山地形分類データ (1989年調査) に追記

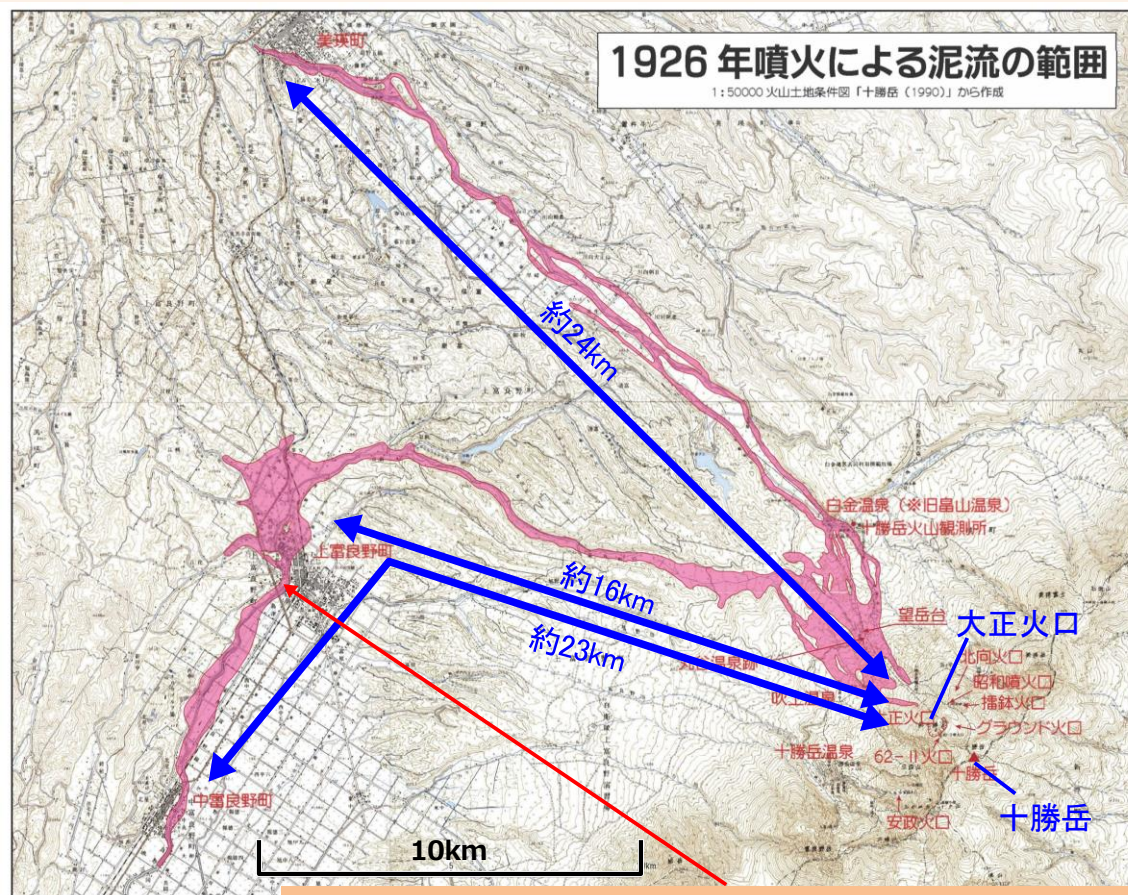


火山泥流・土石流

十勝岳



1926年噴火による泥流の範囲



遭難記念碑

大正15年（1926）5月24日、十勝岳が大爆発、積雪が溶け火山泥流が発生し、144名が犠牲となった。この碑の台座正面に銅版が埋め込まれ、遭難死者144名の姓名が刻まれている。



北海道のほぼ中央に位置する十勝岳は、有史以来しばしば大きな噴火を引き起こした記録があるよ。

大正時代以降の噴火はいずれも山頂のすぐ北側の斜面に集中しているけれど、火山地形分類データでは北側の斜面以外にも火口が多く存在することが分かるね。

火山泥流・土石流は谷に沿って一気に流れ下るんだ。自分で作る色別標高図を使って、地形的に低いところがどこか確認してみよう。



火山地形分類データ（1989年調査）



火砕流・火山泥流

浅間山



噴火の概要

発生日時 1783年8月5日

噴火位置 釜山火口

被害状況 5月9日から8月5日頃まで約90日間活動。7月28日には江戸で戸障子振動し、降灰あり。8月5日午前大爆発とともに鎌原火砕流・岩屑なだれが発生し北麓に流下、下流では泥流に変化して吾妻川を塞ぎ、次いで決壊、多量の水が利根川に出て流域の村落を流失した。また、直後に鬼押出溶岩が北側斜面を流下。死者1151名、流失家屋1061棟等。

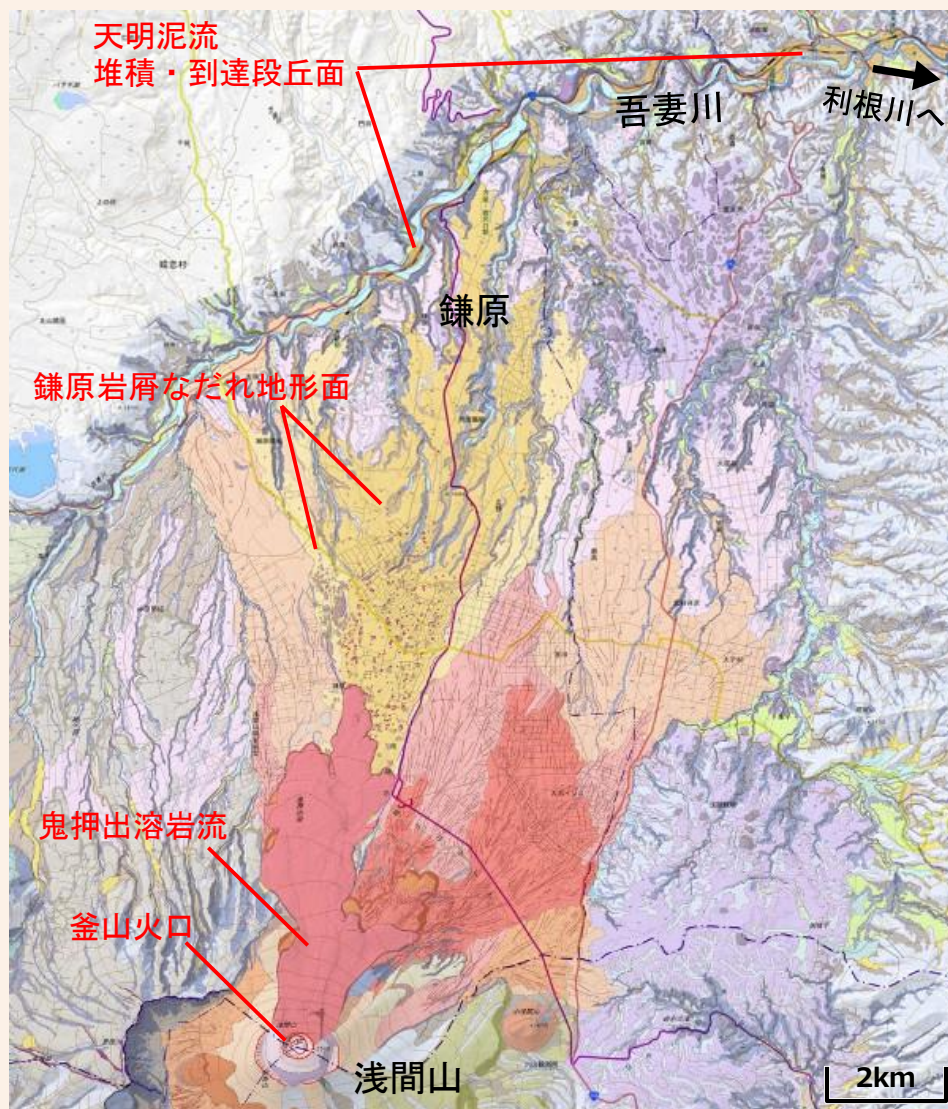
被害状況は気象庁ホームページによる。



有史以来、浅間山は噴火を繰り返していて、その中でとくに大きかったのは1783年(天明3年)の噴火だよ。

5月から始まった噴火は次第に規模が大きくなり、8月5日に大爆発が起き、火砕流が北麓の鎌原村や吾妻川に流下した。吾妻川では泥流になって流下して、利根川に合流して関東平野を流れ下り銚子や江戸に達したんだ。

火口位置 火山地形分類データ(2020年調査)に追記



火砕流・火山泥流

浅間山



自然災害伝承碑(火山災害)



①供養塔

大量の溶岩流や火砕流が流出し、河川に流れ込み泥流となって、村々を襲った。旧総社町近くの利根川には上流から流れてきた遺体であふれ目も当てられぬ状況であった。



②天明地蔵尊之碑

浅間山の大爆発により発生した泥流は利根川へと流れ下り伊勢崎を襲った。利根川べりの戸谷塚地区には上流の孀恋村鎌原地区から多数の死者や家屋・材木等の流出物が打ち上げられた。



天明泥流が流れ下った吾妻川、利根川、江戸川沿いには供養塔などが多数建立されているよ。



③石橋供養塔・降砂洪水記録之碑

天明3年(1783)の浅間山噴火による降灰により、利根川などの川床が上昇した。天明6年7月13日から16日(1786年8月6日から9日)まで大雨となり、諸河川の氾濫をもたらした



④水死諸精霊諸畜類

沿岸の住人は、まるで落ち葉のように流されてゆく無数の人や牛馬の亡骸を見ても、なすすべもなく見送ることしかできなかったという。



⑤天明三年浅間山噴火横死者供養碑

吾妻川へと流れ出た遺体は、さらに利根川、江戸川へと漂い出て、当時この近くにあった江戸川の中州(毘沙門洲)へと打ち上がった。住民は涙ながらに遺体を收容し、手厚くこの地に葬り、手向けの石碑を建てた。

